

講 座

## フロイトは何を遺したか

### ーフロイトの復権 (3) ー

布施 裕二

【キーワード】 意識, 前意識, 無意識, エディプス・コンプレックス

#### 第三回 「無意識」とは

いよいよフロイト理論の基礎に当たる部分の「第四章 精神の性質」である。ここからフロイト理論が始まったと言ってもよい。フロイトは次のように説く。

「すでにわれわれは、精神装置の構造、そしてその内部で活動しているエネルギーや力について記述した。そして一つの顕著な事例について、主としてリビドーであるそのエネルギーが、種族保存に役立っている生理的機能の中に、どのように編入されているかを研究、追求した。その際、この装置およびエネルギーこそわれわれが精神生活と呼んでいる機能の基礎をなすものである、という経験的事実が明らかにされたが、これこそ精神生活の特徴的性格をあらわす。そこでわれわれは、精神にとって最も特徴的であると考えられるこれらの性質について論じてみよう。」 (165~166頁)

フロイトが「仮説」として挙げた「精神装置」、そこでメインとして働くエネルギーとしての「リビドー」、それが幼時からの「性機能の発達」としてある、というこれまでの論の流れをまとめ、これから、「精神」として現れるものの特徴を見ていこうとするのである。そして「精神の性質」としての「意識」と「無意識」について説いていく。

「この研究の出発点は、あらゆる説明と記述を許そうとしない意識という究極的な事実である。意識を口にするとき、人々は最も直接的に、自分自身の経験から、それが何を意味するものであるかを知っている。多くの人々は、科学の内部にある人も、外部にある人も、意識だけが精神であるという仮定を立てて満足している。したがって心理学にとっては、精神の現象学の範囲内で、知覚、感情、思考過程、意志行動の区別をつけることしか残されていない。」 (166頁)

意識というのは、「自分が今何をしているか、どういう状態に置かれているのかが、自分ではっきり分かる心の状態」(「新明解国語辞典」三省堂)という常識的理解で、まずはいい。当時の心理学の主流は、「知覚、感情、思考過程、意志行動」などについての研究だったのである。それに対して、フロイトは次の様に言う。

「しかし、この意識的な過程(意識された過程)は、一般の一致した意見によれば、決して欠陥のない、完全な系列ではない。だからこそそこに、精神の物理的、身体的随伴現象を仮定しないわけにはいかなのである。これらの随伴現象は、そのあるものは意識的な(意識された)並行過程を持ち、他のものはそれを持たないために、(全体として見た場合)精神的系列よりも一層大きな完全さを有すると認め

ざるを得ない。」（同）

現実の人間の精神のあり方は、意識的なものだけではないということが、一般的には知られているゆえ、そこに「精神の物理的、身体的随伴現象」というのを仮定する必要があると言うのである。それは、これまで見てきたように、本能のエネルギーであるリビドーに規定された、精神のあり方のことであり、幼時からの発達としてあるもので、大人になった人間が、それらを全て意識出来るわけではない、ということも含まれる。

前回見たように、彼の「精神」についての捉え方は、あくまで身体とくに性的機能のあり方に縛られていて、そこから自由になれないのである。それゆえ、この「精神の物理的、身体的随伴現象」というのを、「これが精神分析学の第二の基本仮説である。」（同）とまで言うことになる。

フロイトが、このように人間の精神の、意識されないあり方＝無意識に注目し、それを精神分析学の中心にあるものとして、解き明かそうとしてきたことは、精神医学の歴史において評価されるものである。たとえそれを「精神の物理的、身体的随伴現象」と捉えたとしてもである。と言うのも、この「無意識」という概念そのものが、主としてヒステリー患者の治療において捉えたものであり、それなりの「事実」を反映しているからである。それをフロイトは、人間一般の精神のあり方にまで拡張していった。その結果として、彼は「精神分析概説」（1938年）で次のように説く。

「つまりわれわれは、精神過程に三つの性質を見出した。すなわち、それは意識的bewusstであるか、前意識的vorbewusstであるか、または無意識的unbewusstである。これらの性質を帯びた三種類の内容の精神過程間の区別は、絶対的なものでも、永久的なものでもない。前意識的なものは、われわれの見たように、われわれが手を加えなくても意識化される。無意識はわれわれの努力によって意識化さ

れるが、その際、われわれは非常に強い抵抗を克服したのだという感じを持つこともしばしばあり得る。」

（169～170頁）

ここで説かれているのは、フロイト理論の有名なところであり、「意識的」「前意識的」「無意識的」という、精神の性質の区別である。それゆえ、それぞれについて、この前に説かれている文から、更に少し詳しく引用する。

「ただその場合われわれは、意識が一般的にいつて、極めて一時的な一過性の状態に過ぎないことを思い出すのである。意識的なものは、ただ一瞬のあいだだけ存在するにすぎない。」（169頁）

「こういう状態にあつて、容易に無意識状態を意識状態と交換し得るすべての無意識を、それ故にわれわれはむしろ『意識化可能な』もの、あるいは『前意識的な』vorbewusstものと呼びたい。」（同）

「その他の精神過程や内容は、このような意識化への容易な通路を持っていないので、これまでのべてきたような（精神分析の）方法で解明、推定され、意識的な表現に置き換えられなければならない。これらのもののために、われわれは本質的に無意識なものという名称を準備している。」（同）

以上述べられているのを簡単にまとめると、容易に意識出来るのを「前意識的」なもの、なかなか意識出来ず、精神分析治療などで意識されるもの（強い「抵抗」を克服して）を「無意識的」なものとするというのである。これはフロイト理論のいわば「基本」というものであり、フロイトの考えはここから始まり、ここに終わるという程、大事なところである。それゆえ、このような見方が出てきた経緯などについて、もう少し詳しく、彼の以前の著作からも見ていく。

次に挙げるのは、1915年に発表された「無意識について」という論考の一部である。「精神分析学概説」の20年以上前のものであるが、ここでフロイトは初めて「無意識」について正面から取り上げている。その意味で、彼の原点的な捉え方がそこにあるので、それを見ていく。

「意識されない精神というものを仮定し、この仮定によって科学的な仕事を行なう正当性について、各方面から反対をうけている。これにたいしてわれわれは、無意識の仮定は必然的であり、正当であること、また無意識の存在については、いくつも証拠があることをくわしくのべられる。意識のあたえるデータには多くの間隙があるものであるから、無意識の仮定は必然的である。健康な者にも、患者にも、意識にのぼらない他の作用を、前提としないと説明のできないような、心理的現象がたびたび現われる。それは健康者の失錯行為Fehlhandlungや夢ばかりでなく、患者について精神症状とか強迫現象とかいわれているものが、すべてそうである——われわれの日ごろの個人的な経験にも、動機のない思いつきというものがあるし、操作のいきさつがかくされている思考の成果といったものがある。」（傍点はフロイトによる）<sup>1)</sup>

ここに「無意識」についての、フロイトの基本的な見方が述べられている。「失錯行為」については「日常生活の精神病理学」という著作で、「夢」については「夢判断」という著作で、「患者について精神症状とか強迫現象とかいわれているもの」は様々な著作で、それぞれ詳しく説かれている。それらの「無意識」と呼ばれるものに共通するのは、自分でどうしてそういう精神のあり方になるのか、気付くことが難しい（気付けない）ことである。

たとえば、ある間違っことを言ったり行ったりした時、何故そうしたのかが分からなかったり、ある不思議な夢を見た時、どうしてそんな夢を見たのかが分からなかったりするような場合である。また、

患者の幻覚や妄想、何かを行わねばと強く気持の中で迫られて行動したりする強迫現象の場合も、そうだと言うのである。更に、自分達の普段のあり方では、自分でどうしてそういう思いが湧いてくるのか分からない、「動機のない思いつき」もそうだというのである。自分でそれとして意識出来ない精神のあり方全般を、フロイトは「無意識」と呼んだのである。

フロイトのこの見方に対して、当時の反応がどういうものであったかについて、1925年に発表された「自己を語る」から引用する。

「精神分析にとっては、すべての心的なものは、はじめには無意識的であり、ついで意識的な性質のものがそれに加わったり、加わらないままだったりするのであった。この点では、もちろん、哲学者たちの反対にあうことになった。彼らにとっては、『意識的』であることと『心的なものである』ことは同一であり、『無意識的で心情的なもの』というようなおかしいものは考えてもみることができないと断言したのであった。しかし、それは何の役にもたたなかった。人々はこのような哲学者たちの特異体質には、肩をすくめて通りすぎるより他はなかったのである。自分にはなにも分からないで、なにか自分の外の世界にあるなにか事実なのだと推論しないわけにはゆかぬような感情の高まりがしばしば起こることや、その力の強さなどについて、哲学者などの知ることのない病的な資料について経験の示すところは、有無をいわせぬようなものではなかったのである。」<sup>2)</sup>

見るように、当時の哲学者達から大きな反対に遭ったという。哲学者達にとっては、意識的＝心的なものであり、無意識的なもの、しかも心情的なものなど認められないからである。そして、それに対してまともな反論が出来ず、ただ自分達の経験した事実を大事にして、そこから無意識の存在を主張するしかないと言うのである。

ここに哲学者達とフロイトの対立が生じているのは、それほど不思議なことではない。そもそも考えるいわば「土台」が異なっているからである。哲学者と言われる人達にとっては、人間の精神を捉えるにしても、あくまで「一般的なあり方」こそが問題となりうる。「精神とは何か」という観点である。その抽象された一般的なあり方こそが、まず問われるのである。そこにおいて「意識」も問われることになる。それがどのようなものであり、どのように創られていくかという観点からである。「心情的なもの」も、そこに含まれていくのである。これに対して、フロイトはあくまで自分の経験とくに治療体験から、人間の精神を問題にしている。そこでは人間の精神の特殊的・個別的なあり方こそが対象になっており、そこから得られたことで、「人間の精神とは」を見ていこうとしているのである。とくにフロイトが対象にしたのは、ヒステリー患者と呼ばれる人達であり、その精神的なあり方（その個別的なあり方）から、「無意識」という概念を引き出し、それを人間一般に当てはまるようにしてみせたのである。

分かりやすく言うならば、哲学的な立場というのは、対象に上から「一般」という網をかぶせていくのに対し、フロイトの立場は限られた対象を下から、その意味を見ていき、そこから「一般」を見ていくというものである。

それは「意識」についての捉え方の違いにも現われている。フロイトの捉える「意識」というのは、先に見たように「極めて一時的な一過性の状態に過ぎない」（169頁）という、感覚器官に基づく脳のあり方というものであり、哲学で言う「精神の創られ方」における「意識」というものとは、概念的にも大きく異なるものである。

けれども、フロイトは「精神分析概説」を書く晩年に至るまで、哲学者達との対立の意味が分からないうままであった。

「多くの哲学者その他の人々が反対し、無意識な（意識されない）精神とは一つの自己撞着であると論じ

ている。」（166頁）

そして、先に挙げた精神の三つの性質（意識・前意識・無意識）についても、次の様に述べている。

「精神的なものには以上三つの性質があるという学説を、このような一般論として単純化して叙述することは、問題の解明に寄与するより、むしろ測り知れぬ困難を招くきっかけになるように思われるかもしれない。しかし、本来この学説は、決して理論ではなく、われわれの観察の事実に対する最初の決算報告なのだということ、それはできる限りそれらの事実と密接に結びつこうとするものであって、それを説明しようとするものではないことを忘れてはならない。」（170頁）

このようにフロイトは、晩年になっても、自らの学説を「決して理論ではなく、われわれの観察の事実に対する最初の決算報告」と述べている。「理論」と呼べないのは、そう言えるほどの自信がないからであり、その根本的原因は、我々から見ると、彼の「本能論」にあるのだが、フロイトはそう思うに思っても致すことないまま、この世を去っている。

けれども、フロイトの「無意識」の捉え方には、歴史上見るべきもの・評価されるものがあるのであり、それをこれから彼の挙げている「事実」から見ていく。先にフロイトが「無意識について」で挙げているもののうち、「夢」については「第五章 夢解釈に関する説明」で、「患者について精神症状とか強迫現象とかいわれているもの」については、「第六章 精神分析技法」で取り上げることになるので、ここでは「失錯行為」と言われるものについて、「日常生活の精神病理学」というフロイトの著作から見ていく。

この「日常生活の精神病理学」には、言葉についての「度忘れ」や、「言い違い」「読み違い」「書き違い」「思い違い」、そして「為損ない」など、様々な「失策行為」と言われるものが具体例とともに説

かれています。その中から、「名前の度忘れ」について、より簡単で分かりやすそうな例から見ていく。まずフロイト自身が体験した例である。

「(1) ある患者が私に、リヴィエラの保養地を一つ推薦してほしいといってきた。私はジェノヴァのすぐ近くにある適当な土地を知っていて、そこで開業しているドイツ人の医者の名前も思いだしたし、また、その土地の名前をよく知っていることも確かであったが、それをどうしても思いだすことができなかった。私はやむをえず、その患者を待たせて家族の女たちに聞きに行った。『ジェノヴァの近くの、あの土地の名前はなんといったかね。ほら、ドクトルNの小さな診療所があって、例の婦人がずいぶん長いあいだ治療を受けていたところだけど』——『ほんとうに、あなたにその名前が思いだせないのはもっともですわ。だってネルヴィNerviというのですもの』なるほど神経Nervenとなら、私はうんざりするほどつきあっているというわけだ。」<sup>3)</sup>

ここでフロイトが述べているのは、知っているはずの土地の名前を、なかなか思い出せなかったのは、「自分がうんざりするほどつきあっている」ものに似た名前だったからで、思い出したくないという無意識の思いがあったからという。神経症患者を相手に、よほど辛い日々を送っていたと思われる。

また、他人の例としては次のものもある。

「(6) ユングが報告している次の例にも『自己関係づけ』という無意識の傾向を認めることができる。

『Y氏はある女性に思いを寄せていたが、その女性はやがてX氏と結婚した。Y氏とX氏とは古くからの知り合いであり、仕事のうえでも交渉があった。ところが、それ以来Y氏はX氏の名前をよく度忘れするようになり、手紙を出すときなどは、わざわざその名前をほかの人に聞かねばならないことさえあった』

まえにあげた例にも『自己関係づけ』の傾向を認

めることができたが、この例の場合、どのような動機で度忘れが起こったかは、さらにはっきりしている。すなわち、幸運なライバルにたいする憎悪の感情が直接に現われたものと考えることができよう。つまりY氏はX氏をまったく無視しようとしたのであって、いわば『あの男のことなど思いだしてもいけない』というわけである。」<sup>4)</sup>

この例と先の例に共通しているのは、苦痛な感情体験の存在である。前者は「うんざりするほど」神経を病む患者を診ている苦痛であり、後者は失恋からくる苦痛である。そのような苦痛な思いがあるゆえに、それに関わる名前がなかなか思い出せないのだと、フロイトは説くのである。けれども当人は、どうしてその名前が思い出せないのかが分からない。それゆえそれは、無意識的なことだというのである。それがもしも割と簡単に思い出せるようなものなら前意識的と言われるものになる。ここで「意識する」というのは、思い浮かべようとして、すぐに浮かべられることを指すのである。

このような経験は誰にでもあり、これが先にフロイトが述べている「健康な者にも、患者にも、意識にのぼらない他の作用を、前提としないと説明できないような、心理的現象がたびたび現われる」<sup>1)</sup>ということの一つの例である。確かにそのような事実があり、それを無意識的なあり方としたとして、その意味するものがフロイトの説くようなものであるのかどうか問われる必要がある。すなわち、フロイトの言うように、苦痛なことがあるから、その名前が浮かばなくなっているのかどうかである。

まず最初の例である。その土地がどこにあるかは知っており、そこに住んでいる医者の名前も思い出し、その土地の名前もよく知っているはずなのに、その名前を思い出さないという認識についてである。「認識は頭の中に結ばれる外界の像」という基本的な立場に立って見ると、その土地の像は浮かべられるのに、土地の名前の像が浮かべられないという認識のあり方である。しかも、それを知らないのではなく、知

っているすなわち像として持っているはずなのに、それが浮かんでこないという場合である。本来ならば、その土地の像に重なって浮かんでくる筈の像が、その時浮かんでこないという認識である。しかも他人に教えられると「そうだ」と分かる＝像が重なる場合である。

そこではまずもって、それまでにそれらの像が、どれくらい強い結びつきとして創られてきたものかが問われる必要がある。すなわち、その土地の像が頭の中に浮かべば、すぐにその名前の像も浮かんでくるほど緊密なものなのか、それともそれほど強い結びつきがないのか、ということである。

たとえば、ここでの「ネルヴィ」という名前にしても、それほど強烈な印象を与えるものではなく、何となく憶えたものなら（慣れ親しんでいる「神経」という名に近いものなら尚更）、その土地の像ほど強くは像として結ばれない、それゆえ土地の像にすぐに重なってこない、ということもあり得る。また、たとえ当初は強烈な像として結ばれたとしても（「神経」という言葉に似ている驚きなどで）、その後それらの像を、どのように思い返すかによっても違ってくる。その土地の風景やそこに住む人のことを思い起こすことはあっても、土地の名前を思い起こすことが少なければ、自ずからその像は薄れていき、その土地の像との結びつきも薄くなっていかざるを得ない。

このような像の展開をも視野に入れて、「名前の度忘れ」というのを見ていくことが必要である。フロイトの場合、「うんざりしている」という感情が、その対象に近い名前をも忘れさせていると捉えている。すなわち、忘れたいという思いが、その対象に近い言葉をも忘れさせるというのである。フロイトにとっては、「神経」に近い言葉である「ネルヴィ」は、あまり思い出したくないものということになる。

それは私達の「頭の中の像」という捉え方からすると、土地の像は残っていても、そこに結びついていて名前の像を消したいという思いがあり、それを浮かび上がらせないような認識の力が働いていると

いうことになる。これは、一度は結びついていた土地とその名前の像とを切り離し、名前の像だけを忘れるという頭の使い方による。しかも、そうしようと意識して行うのではなく、気が付かないうちにそうしているというのである。それは、嫌なものは忘れたいという、その人の思いによってである。

けれども、この場合フロイトにとって、「忘れたい」という思いが、どれほどに強いのかということが、その対象について問われなければならない。「飽き飽きしている」というのと、「忘れたい」と思うこととは、直接につながるものではなく、まして「忘れたい」と思う対象は、直接的な名前（神経）ではなく、それに似た名前（ネルヴィ）なのである。似ていたとしても異なる像のあり方を、どのように忘れようとするのであろうか。そのつながりを明確にすることなく、強引に二つを結びつけているのである。

では次に、Y氏がX氏の名前を度忘れするようになった場合を見てみる。Y氏が思いを寄せていた女性がX氏と結婚してから、X氏の名前を忘れるようになったことである。

ここでも「頭の中の像」の展開として見てみると、Y氏の頭の中に、X氏の像とともに名前の像もしっかり結びついてあったことは、「古くからの知り合いであり、仕事のうえでも交渉があった」ということから分かる。そして、X氏が女性と結婚してからも、それなりの付き合いがあったことは、「手紙を出す」という事実からも分かる。

そのように、X氏の像はあっても、その名前の像が薄れてしまい、それとX氏の像との結びつきも弱まっているということである。そこには、X氏の名前の像が薄れていくような、Y氏の生活過程があったということである。それは一体いかなるものであったか。

まずもって考えられるのは、そのような像の描かれる機会が減っていき、X氏の像も含めて、X氏の名前の像が薄れていくような生活過程である。具体的には、X氏との関わりがそれまでより減っていき、X氏の像や名前の像が浮かぶことが少なくなってい

くという生活過程である。

次に考えられるのは、そのような像を浮かばせることを、出来るだけしないようにしていく生活過程である。それを思い浮かべないようにしよう、浮かんでも忘れようとするものである。そこには、自分の意志の力が無意識的にでも働くことになる。とくに、X氏の像を思い浮かべると、自分の恋した女性の像も浮かんでくるし、その女性のことを思い浮かべると、X氏の像が浮かんでくるのみならず、その女性は今やX氏の姓となったのであるから、尚更その名前の像を思い浮かべないようにしていく生活過程が、そこに存在したとしても不思議ではない。

更には、仕事上において、X氏との関係以上緊密な、別の関係が結ばれ、関心がそちらに向いていくという、Y氏の関心の向け方が変化する生活過程が存在すれば、尚更である。X氏の像や名前の像が、ますます薄れていくことになる。

まずは簡単に、以上のことを頭において、Y氏の事実を見ていけばよい。

しかるにフロイトの解釈は、先に見たように、「幸運なライバルに対する憎悪の感情が直接に現われ」「Y氏はX氏をまったく無視しようとした」「いわば『あの男のことなど思いだしてもいけない』というわけ」といものである。

そこでは名前の度忘れが、「憎悪の感情→無視→思いだしていけない」という、頭の中の流れで捉えられている。けれども、そこでのつながりは、必ずしもフロイトの言うとおりになるとは限らないのである。

まず「憎悪の感情」を持つということにしても、必ずそうなるとは限らない。女性に対して諦めの気持を持つことだってあり得るし、そうなるに関心の対象から外れて、女性とともどもX氏についての像を思い浮かばせることが少なくなっていく。むしろ「憎悪の感情」を持つことで、その対象を思い浮かべることも多く、かえって忘れないものになっていく可能性も大きい。

だからこそ、そこで「無視」という努力を行うこ

とになると言うのであろうが、対象を見ないようにしようとすればすれば、そのことが頭に浮かんでくるのは、日常で経験することである。「対象を見ない」とする頭の中には、対象の像が描かれているからである。そこでもし「憎悪の感情」が働くとするなら、積極的にX氏との関係を断っていく方に、X氏の妻となった女性を忘れていく方に、生活を変えていくしかない。

「思いだしていけない」という頭にしても、そのように禁ずれば禁ずるほど、頭の中に浮かんできたりするものであり、それが直ちに「名前の度忘れ」につながるものではない。もし「思いだしていけない」と思ったとして、そこでどのような生活を送っていたのか、X氏達のことが忘れられるような、どのような頭の使い方をしていったのか、そこが問われねばならないのである。

以上のように見てくると、フロイトの「無意識」についての捉え方は、はなはだ単純なものでしかないことが分かる。彼は、それを「苦痛」とか「憎悪」という感情に結びつけ、それらの感情を引き起こした出来事を、意識しないように抑えつける（「抑圧」と呼ぶ）ことで、無意識となると見ているのである。そこには、そのように展開する頭の中の流れも、そういう流れを創り出す生活過程も、何もない。

このような見方は、精神分析療法の初期における、フロイトの治療体験から創り出されたもので、どのようにしてそうなったかは、いずれその項で説くとして、フロイトの「無意識」の捉え方について、もう少し「精神分析概説」の中で見ていくことにする。

「意識化Bewusstwerdenという過程は、何よりもまず、われわれの感覚器官が外界から獲得した知覚と関係づけることができる。したがってそれは、局所論的考察からいえば、自我の一番外部の皮層において生ずる現象である。同時にわれわれは、身体内部からも意識への報告を受ける。これはわれわれの精神生活に対して、外的知覚以上に強力な影響を及ぼすさまざまな感情である。」（171頁）

ここでフロイトは、「外界から獲得した知覚」のみならず、「身体内部からも意識への報告」があると述べている。これは、認識というものが、外界のあり方を像として映し出すのみならず、内界のあり方に影響されたり、それを像として映し出す（空腹感、疲労感など）という人間のあり方を、フロイトなりの見方で捉えている、という意味で評価される。

ただ、フロイトの場合、「身体内部」の本能的なあり方を重視していて、そこが精神を根本的に規定していると捉えるのである。更に、次のように述べる。

「自我の周辺における意識的な過程、そして自我内部におけるその他すべての無意識過程の存在、これらはわれわれが仮定し得る最も単純な状況である。事実動物にあつてはこのような状況であろうが、人間の場合にはそこに複雑さが加わり、その結果自我の内的過程が意識の性質を獲得するのである。この複雑化は、自我の内容を、視覚的、なかならず、聴覚的知覚の記憶痕跡と強固に結合させる言語機能の働きである。このような複雑化が成立した後は、知覚を含む皮層の周辺は内部からも著しく刺激され、表象作用、思考過程のような内的過程が意識化され得るようになり、二つの可能性を識別するための特別な機能、すなわち『現実検討』が必要になる。」（171頁）

ここで説かれているのは、「無意識過程」というものは、動物にもあるものであるが、人間は言語機能を持つゆえに、その中身は複雑であり、身体内部から出てくる「表象」「思考」というものも意識化されてくるので、それと外界からもたらされてくるものとを区別することが必要（『現実検討』）になってくる、ということである。

ここでのポイントは、「身体内部から出てくる『表象』『思考』」と、「外界からもたらされてくるもの」とを区別する必要があるということである。フロイトは「本能論」の立場であるから、全ての精神的なものは身体から出てくるものとする。けれども「認

識は像」という立場からすれば、フロイトが「身体内部から出てくる」と言っていることの中身として、二つのあり方を分ける必要がある。一つは先に述べた「身体の内界としてのあり方としての像」であり、もう一つは「認識の内界としてのあり方の像」である。

前者は、人間が生活していく上での、脳の生理的な面の統括についてのものであり、食・睡眠・運動に関わってきて、自分の頭の中に像として浮かんでくる（空腹感・満足感・疲労感・充足感など）。後者は、人間が生活をしていく上での、像の積み重ねに関わるものである。すなわち、それまでの社会生活で培われてきた、その人自身の「頭の中の世界」というのがそれで、たとえば空腹感から食事をとるにしても、その人らしく食べたい物を選び取り、その人らしい食べ方で食べるというものである。それはそれまでに創られてきた頭の中の像の積み重ねによってである。「好き」とか「嫌い」とかもそうであるし、そこでそのような行動をとっていいかどうかという、規範に関する判断にも関わってくる。

けれども、フロイトにとっては、その二つのあり方が区別されず、どちらも「身体内部から出てくる」ものとなる。人間が動物と異なるのも、脳の認識的側面の大きな違いなのだが、そこをフロイトは「言語機能」によるものとする。確かにその機能は、人間と動物との大きな違いであるが、そのような機能を持つに至った、そしてそれを発展させてきたのは、人間の脳の認識的側面の働きである。像の積み重ねの発展によって、それを表現しようとする脳の働きもまた発展することになり、それによって認識も更に発展するからである。

ただ、フロイトがこのように「言語機能」を強調するのにも、それなりの意味があるのだということは、分かっておく必要がある。それは彼の治療的経験から引き出されたものであり、患者の無意識の内容を言語化していくことが、精神分析療法の根幹をなすからである。

後に詳しく説くことになるかもしれないが、そもそものフロイトの出発点は、「言語的な表現の大事さ」



ということにあった。そこを彼の「自伝」から見てみる。

「ヴィーンへ帰った後に、私はまたブロイアーの観察に関心をむけるようにし、彼からいろいろのことを話してもらった。その女性の患者はなみなみならぬ教養と天賦とをもった少女であったが、自分の深く愛していたその父親の看病をしているあいだに病気になったのであった。ブロイアーがひきうけたときの彼女は拘縮や抑制や精神錯乱をともなう麻痺などの多彩な病像を呈していた。偶然のこの観察からこの医師は、患者がそのときに支配されている感動にみちた空想にたいして言語的な表現をあたえるようにさせると、このような意識障害から解放されるものだということを認識するようになった。」<sup>5)</sup>

これは精神分析の歴史で有名な「アンナ・O」という症例についての記述で、フロイトはこのブロイアーという医師の体験から学んでいくことで、精神分析の道を歩きだしたのである。そこでは「患者がそのときに支配されている感動にみちた空想にたいして言語的表現をあたえる」ことが、治療上大事なことでとされている。そして、それ以後の精神分析治療でも、言語的表現の大事さは続いていくことになる。

「言語的表現をあたえる」ことの意味については、後の「精神分析技法」の項で、病との関連に置いて説くことになると思うので、ここではフロイトが言語機能を重視したことの問題について簡単に説いておく。

それは端的に言うと、現実の社会関係の捉え方が狭くなってしまい、それによって人間精神の捉え方も幅の狭いものになってしまうということである。というのも、先に述べたように、言語はあくまで像である認識の表現であり、認識を交通関係におくためのものである。そこで大事なものは、大元の認識のあり方であり、それを規定している社会関係なのである。人間の精神が動物に比べて複雑になっているのも、人間が社会関係を発展させながら、精神をも

発展させていっているからであり、その結果、動物にはない人間の歴史を築いてきているのである。その精神の複雑さを、単に言語機能だけから捉えてしまつては、言語で表された範囲についての問題だけにしかねない。

この項の最後に、フロイトが到達した「無意識」の最終的な見方を検討する。

「個体とその精神装置の発達史を回顧してみるならば、エスの中に一つの重要な区分を確認することができる。最初すべてのものがエスであった。自我は外界からの絶えざる影響によってエスの中から発達してきたものである。この遅々たる発達の間、エスの若干の内容が前意識状態に変化し、自我の中にとり入れられた。他のものは依然として不変のままエスの中にとどまり、容易には近づきがたいエスの中核となった。しかしこの発達過程中、まだ幼弱な自我はすでにとり入れていた若干の内容を手放して再び無意識状態に戻し、さらにまた自我がとり入れたはずの多くの新しい印象に対してもそのように振舞ったため、これらの印象は閉め出しを喰って、ただエスの中にその痕跡を残すだけになった。このエスの後の方の部分を、われわれはその発生経過を考慮して『抑圧されたもの』と呼ぶ。」172頁)

ここは前回取り上げた「性的機能の発達」を頭において理解する必要がある。とくに「抑圧されたもの」

ここでフロイトが述べているのは、人間の精神発達のいわば「基本」というものである。フロイトなりに、人間の精神発達是一般的にこのように行われると説いている。

まずもって「最初すべてのものがエス」なのである。これは本能的なあり方に規定された無意識の状態であり、それが「外界からの絶えざる影響によって」自我が「エスの中から発達してきた」というのである。ここは赤ん坊からの精神発達を、念頭に置いて理解するといひ。この世に生まれて泣くしかなかった赤ん坊が、次第に「自分」というものを持つようにな

っていく過程としてであり、それをフロイトなりに説いているのである。

その精神発達を「頭の中の像の発達」と捉える私達とは異なり、フロイトは本能的なあり方が「外界からの絶えざる影響によって」変化していき、本能的な欲求を満たしていいかどうかを判断する機能を持つまでになるといい、そのようになったものを「自我」と呼ぶのである。その自我が意識ということに関わるのであり、外界と接して、自らを脅かすものから身を守るために、それまでに意識したことも、再び意識しないものとして無意識の状態に戻してしまふというのである。

その最たるものが、前回取り上げた「エディプス・コンプレックス」であり、母に対して性的な本能から関わろうとした子どもが、父からの「去勢威嚇」によって、その欲望を断念し、それを意識しないあり方にしてしまうというものである。それが「抑圧されたもの」として、人間の無意識の中で大きな意味を持つと捉えるのであり、これは、先に取り上げた「日常生活の精神病理学」における「無意識」とは、大きく異なったものへと展開しているのである。

それは単に日常生活に存在しているものというより、人間の精神発達において非常に重要なものであり、後の精神活動を規定し、時に精神の病へと至らせるものとして捉えられることになったのである。これは彼の治療の経験や自らの人生体験から引き出したものであり、その意味で彼の独創的なものと言える。それについて彼は「自伝」で次の様に言う。

「経験がましてゆくにつれて、エディプス・コンプレックスが神経症の中核となるものであることが明らかになってきたことを付言しておかなければならない。エディプス・コンプレックスは小児期の性愛生活の頂点であるのみならず、また、そこからその後のすべての発達が発足していく節点でもあった。しかし、それとともに、精神分析によって神経症にとって特殊な契機をあらわにしようという期待はきえてしまうことになった。ユングが精神分析を研

究していた早期にぴったりと表現していたように、神経症は、これといって特別な、それだけに特有の内容をもっているのではないということ、また神経症者は正常な人の場合には運よくも征服されたものと同一のものについて破綻をきたしているのであるといわなければならなかったのである。」<sup>6)</sup>

このようにフロイトは、エディプス・コンプレックスこそが、人間の精神発達において大事なものであり、それをうまく克服出来なかった者が、神経症に至るのであり、その病において「特殊な契機」があるわけではないと言っている。

これは小児期における精神発達の大事さを強調するという意味で、それが精神の病に関わるという意味で、それなりの妥当性を持つとは言えるものの、ある時期における発達のあり方、それも特殊なあり方をそこまで強調してしまい、その克服が出来るかどうかで、病になるかどうかまで言ってしまうところに、フロイトの大きな逸脱がある。

その結果、治療においても、無意識的なあり方になっているコンプレックスを、どのように意識し、どのように克服していくかが課題となり、もっぱら過去に遡っての治療となっていく。これは「本能論」ゆえの展開であり、生まれてから性的な本能をどのようにコントロールしてきたかが、大きく問われることになるのである。

このような治療展開は、先に挙げたアンナ・Oなどの事例からの学びとは、大きく異なるものとなった。当初は「心的外傷」と言われる、心に傷を受けるような体験が、意識されないままになっていて、それが病の原因になり、それを意識していくことが治療の要になっていたが、今やエディプス・コンプレックスという、はるか以前の出来事が「心的外傷」として対象になったのである。

このようなフロイトの「小児性愛の重視」という展開の流れは、精神分析をともに行ってきた者の離反を生むことにもなった。彼の「自伝」でも、次の様に述べられている。

「ユングは分析的な事実を抽象的なもの、非人格的なもの、非歴史的なものに解釈しなおそうと試み、そうすることによって小児の性愛にエディプス・コンプレックスを重視することと児童分析の必要とをともに省いてしまおうと考えたのであった。アドラーは精神分析からもっともってはなれて行ったように見えた。彼は性愛一般の意義を否定し、性格形成と神経症の成立とをまったく人間の権力への欲求、すなわち、その体質的な低格性の代償への要求に帰してしまい、精神分析が新しく手に入れた心理学上の獲物をみな放棄してしまったのであった。」<sup>7)</sup>

このように、フロイトの性愛的なものは、それまでの仲間と別れさせる契機にもなった。現代でも有名なユングは、古代神話の中に人間の無意識の原点を見出そうとしていき、アドラーは身体的な劣等さに、性格のあり方や権力への欲求の根本を、見出そうとしていくのである。

フロイトのこのような展開は、「本能論」の立場からは自然なものと言えるが、それがどのような過程で上記のように変わっていったのか、そこにどんな意味があるのかについては、後の「精神分析技法」の項で説いていきたい。

#### 引用・参考文献

- 1) J. フロイト：無意識とは何か，井村恒郎訳，フロイト著作集6，87-88，人文書院，1970.
- 2) J. フロイト：自己を語る，懸田克躬訳，フロイト著作集4，442-443，人文書院，1970.
- 3) J. フロイト：日常生活の精神病理学，池見西次郎・高橋義孝訳，フロイト著作集4，23，人文書院，1970.
- 4) 同上，26.
- 5) 前掲書2)，432-433.
- 6) 前掲書2)，464.
- 7) 前掲書2)，461.

Lecture

## What Academic Achievement Did Freud Leave ?

—Restoration of Freudian Theory (3) —

Yuji Fuse

**【Key words】** consciousness, the preconscious, the unconscious, Oedipus complex